

森田 淳子さん

芸術大学を卒業後、短大で助手を勤めその後 86 年に染色隊員としてタンザニアに派遣される。92-94 年には母子保健プロジェクトのプロジェクト調整員としてエジプト、94-98 年には教材印刷の専門家としてケニアで活動される。その後、シニアボランティアとして、99-01 年サモア、02-04 年タイ、05-07 年に再びタイに派遣される。現在、アジア雑貨の販売店「プワンプワン」の店長をされている。



訪問レポート

SOCA30周年記念事業の1つとして、今回61年度2次隊、染色でタンザニアに派遣されていた森田淳子(もりた あつこ)さんにお話をさせていただく機会を頂きました。

前もって電話で今回の件をお話しアポイントをとり、約束していた時間は2月27日土曜日の午後3時。電車の都合で約束の時間より30分ほど早く到着してしまいましたが、森田さんに電話でその旨を告げるとすぐに車で迎えに来てくださり、その優しさに緊張していた心が少しリラックスできたのを感じました。駅から車ですぐに森田さんのご自宅に到着。大きなお家の一部屋に通され、お茶を飲みながら談話開始。まずはお互いの自己紹介から話をはじめました。やはり同じ協力隊といっても、任国も違えば、職種も違う。国が違えば文化や生活様式が違って来るし、職種が違えば毎日行う仕事も違ってきて、お互いに興味深く話に聞き入りました。森田さんの車の中ではタイの音楽がプレイヤーから流れていましたが、それもそのはず、森田さんはタイでもボランティア活動されていたとの事。森田さんはタンザニアで協力隊を経験された後、ケニアやサモア、タイにおいて時には調整員、時には専門家として働かれた経験豊富な方で、今はエスニック系の衣料品を販売するオンラインショップの店長として働かれています。

今回、18 - 3高木さんと一緒に森田さんへインタビューを行いました。森田さんからの高木さん

へのアドバイスにはやはりプロだなと感じられるところがたくさんありました。高木さんは日本に帰国後、任地の水上生活者の生活を支援するために彼らが作ったアクセサリーを日本で販売する活動を行っています。その話と実際のアクセサリーを森田さんにお見せしたところ、時間を忘れるくらい話が盛り上がり、あっという間に2時間が経過していました。特に印象に残っているのは、いかにアクセサリーのかわいらしさを出すかというところ。男性からの視点では、配色を合わせるとカワイイとかここをクロスステッチにすると素敵という話はあまり馴染みのないものでしたが、女性同士では任国、職種の違いなど関係なくお互いに共感できていた様子。インタビューという事でお邪魔した私たちでしたが、結局最後は森田さんのアドバイスをたくさん頂き帰ることとなりました。要領の得ない私たちにきちんと対応頂いた森田さんに大変感謝しております。

訪問レポート

平成18年度3次隊
ボツワナ共和国、マウン技術短期大学 配属
コンピュータ技術
高楠 悟史

題:帰国後の活動

今、自分がJOCVをどう思っているか？

2年間活動してきた青年海外協力隊。いまは懐かしく思うほどに、帰国してからの時間が経過しました。まだ帰国して1年ほどですが、遠くアフリカの地は、容易く旅行にいける場所ではないし、日本に居て感じることのできない場所です。頑張ってた覚えた現地語もだんだんと忘れてゆき、毎日の仕事の中で協力隊の話をする機会もほとんどありません。

その青年海外協力隊を懐かしく輝かしく思う反面、時々、行かなければ良かったかとも思うことがあります。例えば、帰国後の就職活動していた時の話ですが、私の帰国時はちょうど不況の真っ只中でした。その状況下で協力隊に行って来たという経験は就職活動のプラスにはならず、就職するまでに大変苦労しました。また会社に入ってから、同年代の人ができる仕事を自分ではできなかつたり、日本の社会で当たり前とみんなが思っている事を、自分は当たり前と思うことができなかつたりと悲しい思いをした事もありました。

どうして「今、JOCVをそう思うのか？」の話

やはり日本にいと、自分の友達や同僚、同年代の人と比べてしまうためだと感じています。あの子はもう結婚して子供がいるし、とか、あの子は仕事で頑張ってた出世街道を歩いているとかどうしても他の人と比べてしまいます。その時に、やはり青年海外協力隊の2年間は日本の社会の中では、それほど価値を見出せないと感じてしまいます。言い換えると、日本の社会の中にと青年海外協力隊の2年間でできなかった部分、もし協力隊に行かなかったたらこうなっていたかもしれないという部分を重大に考えてしまうのです。

また協力隊体験談や雑誌等で語られる内容の多くは、協力隊の光の部分や協力隊で成功された方に焦点があたり、なかなか協力隊で苦しんだ部分、帰国後で上手く行かなかった話しというのは見る、聞く機会が少ない事も私がこのように感じる1つの理由なのかもしれません。

では、そのような思いをどう昇華or消化していこうとしているか？

協力隊に行った2年間は、とても素晴らしい思い出であるし、すっかり自分の中に、体の一部として組み込まれてしまっているものです。それを日本に合わせるために無理に忘れようとすると、上手く自分のペースをつかめないことになるのだと感じました。

ならば逆に、その思いを分かってくれる人に話していく、そして、青年海外協力隊の2年間で良かった点、悪かった点を同時に見られるようにして協力隊を自分の中で昇華できればよいなと思っています。

また、同じような思いをしている人がいればお互いの悩みを理解しあいながら話ができるであろうし、話をすることで悩みが大きな問題では無くなるような気がしています。

「Vプロ」に期待したこと

帰国後、当然ながら協力隊員では無くなり、2年間活動してきた事がすべて終わってしまった気がしました。しかし、たくさんの人にささえられ続けてこられた2年間の活動をすっかりストップしてしまうのは寂しいと感じていますし、少しでも恩返しをしなければならぬと感じています。何をすれば誰に恩返しができるのかは良く分かっていませんが、とりあえず自分にできそうな事をやろうと思いい、「Vプロ」への参加を決意しました。

協力隊OVのみなさまは、協力隊経験者というだけでなく、協力隊後の就職活動や、今私が悩んでいる問題も同様に経験されてこられた方々だと思います。もちろん人それぞれ、進まれている道は違いますので、自分の状況に似ている、似ていないはあるとは思いますが、協力隊の先輩の話聞くことで自分のキャリアを形成する道しるべとなるのではとも思いました。

私にとっての「Vプロジェクト」

森田さんがお話を聞き、また1つ帰国後の人生の歩み方を知りました。大々的に援助ということではなく、自分のお店で自分が活動して来た国の友達と連携しながら商売をすることで、今までの活動とこれからの活動をつなげられていることを知りました。また、SOCAの交流会で日系ブラジル人とランバダを踊ったり、バーベキューに行ったという話もとても印象に残っています。たくさんの協力隊OVの方とお話をし、自分なりの帰国後の活動の方向を決める事をしようと思いだめた私の「Vプロジェクト」でした。

平成18年度3次隊
ベトナム国フエ市、フエ職業専門短期大学 配属
観光業
高木 佳子

題:2年では終わらない、そして終わらせたくない「思い」

帰国後も続く任地との関係

2年間開発途上国で暮らし、その国の人たちと活動や生活をともにする青年海外協力隊。当たり前ですが、私たちは任期が終わって日本に戻り、その国の人たちはその国で暮らし続けます。たった2年の間で成し遂げられることは本当に極わずか。成果と反省、いろいろな思い出、まだ断ち切ることのできたい「思い」を日本に持ち帰ることになります。その「思い」もたった1つということはありません。それが「2年」という期間の重みです。私が持ち帰った数々の断ち切ることのできない「思い」の1つは、「水上生活者の子どもたちの生活環境をよくできないか?」という「思い」です。

「『かわいそう』」なんかじゃない！」

私は、10年以上大手旅行会社に勤務してから観光業の隊員として観光関連産業の職業訓練短期大学で教鞭をとっていました。同じ任地には手工芸隊員として水上生活者の子どもたちにビーズ細工の作成を教えて販売をしている隊員がいました。私は、学校の合間にビーズ教室をよく覗きにきました。その教室に通ってくる子どもたちは、小学校の3年生くらいで学校を辞めて仕事をしている子、学校にこそ行っていますが学年がダブっていたり、学校に行きながら働いている子もいました。彼女たちの親の多くはシクロ(自転車タクシー)の運転手や市場の下請けという日銭労働に従事しています。なので、子どもでも家計のため働くケースが多いのです。ここだけ聞くと、「かわいそう」と思う方もいるかもしれませんが、彼女たちと過ごしているとちっとも彼女たちは「かわいそう」ではありませんでした。先輩隊員と彼女たちのやりと

りの様子は、「お金に細かい中年おばちゃん(実年齢12歳から18歳)」と「必死で食い下がる外国人」の真剣勝負でした。「モノを作って売る」ということは、当然ですが、「質の維持」が大切で、手を抜いて作ったものは誰も買いません。子どもたちは、継続的に通ってくることで学費、作った個数によって工賃がもらえるしくみだったので1個分でも多くお金が欲しい。なので、必死で食い下がるのです。油断していると材料を盗んでみたり、勝手に学校を休んでみたりと「真剣に向き合っていないければどうにもならない世界」が広がっていました。

そんな子どもたちのお家(小船ですが)に何度か行ったことがあります。親たちは、ジュースを買いに行ってくれたり、ごはんを用意してくれたり、歓迎してくれました。そして「外国で暮らしている

んなら、英語も話せるんでしょ？この子に英語を教えてやってもらえませんか」と、頼まれることも多かったです。6畳にも満たないような小さな小船に5,6人ほどの家族が暮らす、学費が払えなくて留年した経験のある少女の家でした。壁には家族みんなの写真が大切に貼られ、親は当たり前のように自分のこどもの成績を気にしている。「日本にもある家族の風景」です。そう、彼女たちは「かわいそう」ではありません。大切に育てられているのです。ただ、このままでは発展著しいベトナムで1つのハンディを負う可能性があります。それは「学歴社会ベトナム」で仕事を得ていくことです。

「かわいそう」じゃなくて「かわいい」

日本以上の学歴社会の中で「ある程度の継続的な仕事に就く」には職業訓練学校以上を卒業していることは最低限望まれることです。せめて、学費をなんとかしてもらえるしくみを作っていく必要があります。でも、社会の、まして外国の社会を変えていくことがは本当に困難です。なので、できることからコツコツとするしかありません。先輩隊員が教室をやっていた地区で、今でも日本人が個人の立場で子どもたちの支援を続けています。

『フエ・ハッピー・プロジェクト』(<http://www.huehappyproject.org/>)。

ここの商品を買くと、商品を作った子どもたちは学費を準備してもらえます。

(ベトナムの学校は半日制のところが多く、学校に行きながら作業ができます。)私自身は、日本での生活もあるのでベトナムに帰ることができない。

でも、ここの商品を日本で売ることを手伝うことによって、子どもたちの力になってやる事ができる。この思いを先ず、共有してくれたのは、「協力隊とは関係ない東京の友人」でした。

私は、隊員になる前、東京で働いていました。とても大切な友人が働く

ダイニング・バー「QB - HIVE」(<http://www.swim-kikaku.com/pc/qb/index.html>)

)。このお店で「『かわいい！』って思ったら買ってください、『ハッピー・リングプロジェクト』を開始。ちょっとでも、フエで行っていることを理解してもらおう動きを開始しました。去年の9月から開始して、3ヵ月後の12月には売上金の一部で子どもたちにクリスマス・パーティ - をプレゼントすることができました。(<http://qb-hive.bbs.fc2.com/>、2010年1月11日の書き込み。)

「かわいい」ならビジネスになる。

もっと売るにはどうしたらいいんだろう？何を巻き込んでいったらいいんだろう？そう思っている時に、今回の「Vプロジェクト」のお話を頂戴し、大先輩OVである森田さんを訪問させていただく機会を得ました。森田さんは、タンザニアに隊員として派遣されたのを皮切りにJICA関係のさまざまな

立場で海外で活躍されてこられ、今は「楽天市場」上に「ハンドメイド+アジア+大人のかわいらしさ」をコンセプトとしたファッションアイテムとザッカをセレクトしたショップ「プワン*プワン」(<http://www.rakuten.co.jp/pwanpwan/>)をオープンされてます。森田さんは、染色、手芸といった専門性でずっと活動されてこられた方で私が取り出した「ハッピー・プロジェクト」の商品に色や、マテリアルに関するシビアな意見を出してくださいました。ただ、その意見のすべてが、「こうしたら『かわいい』に見える」というプロからの意見で本当に参考になったのです。そして、森田さんは「少数民族の手作業のものがあれば買いますよ」と、さらに具体的にこういうものであったら(ベトナムで)買って来て欲しいというアドバイスももらいました。私の専門は「観光」です。エコツーリズムサイトでもある少数民族の村に馴染みがあります。十分にベトナムにまた行きさえすれば、買ってこれるものでした。それもただ売るのではなく、どう「『かわいらしくしていくか』=『商品として売れるものにしていくか』」のアイデアを頂戴できました。初対面の森田さんから「青年海外協力隊」という共通項だけでこんなにこんなにいろいろなお話が伺えたことに感謝し、同時に「協力隊員0V」の絆のすごさを感じました。

私にとっての「Vプロジェクト」

私は大学まで京都で育ち、学んできました。「故郷」といわれれば、私は胸をはって「京都」と答えます。仕事は大阪と東京でやって来て、今は家族の関係で大津に暮らしています。なので、滋賀県にはいろいろな意味で「縁のある人たち」がいないように思ってきました。でも、今回のことで「海外に行った後に、地域でのつながりが自然に広がっていた」ように思います。本当にありがとうございました。今年中に、短期間ですがベトナムに帰る予定でいますので、みなさんに紹介できるもの仕入れてきたいと思います。